

委員会視察成果報告書

令和 6 年 10 月 4 日

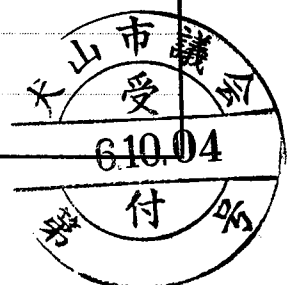
犬山市議会議長

柴田 浩行 様

議員名 大沢 秀 敬

下記のとおり、視察の成果を報告いたします。

(1) 視察年月日	令和6年 10 月 1 日(火) ~ 令和6年 10 月 2 日(水) (1 泊 2 日)
(2) 視 察 地	石川県加賀市 富山県南砺市
(3) 視察の種類	☒ 常任 特別 委員会 (総務 委員会)
(4) 視 察 成 果 (視察地ごとに記入)	別紙にて報告します
(5) 犬 山 市 に 対する提言	別紙にて報告します



視 察 成 果 報 告 書

犬山市議会 議長 柴田 浩行 様

犬山市議会議員 大沢秀教

下記のとおり、視察調査の成果を報告いたします。

調査日時：令和6年10月1日（火）

訪問先：石川県加賀市

形態：常任委員会（総務委員会）

調査項目：「移住定住促進策とシティプロモーションについて」
「加賀市EVシェアリング・サービス『OFFON』について」

調査の内容

加賀市の移住施策は、石川県内の民間会社である（株）ぶなの森が、年間800万円で委託を受けて、市役所とともにを行っている。加賀市は元来、山代、片山津、山中といった有名な温泉地を有する観光地であるが、移住体験事業も、「ただの観光で終わらせない！」という工夫を重ねて行われている。また、山中漆器や九谷焼といった伝統工芸も盛んな地域であり、文化の香りの高い町でもある。海辺や山間地での自然とともに生きる暮らしとテレワークでの仕事という提案もあり、多様な移住の希望に対応できる町であるところが加賀市の強みである。

首都圏、関西圏の両方をターゲットにしており、毎月のように移住関連のイベントに積極参加されている。また、テレビCMについても、アニメとロズさみやすい音楽で作られ、親しみを感じる作品が放映されている。

いろんな自治体で行われている移住体験事業の手厚さとお得感は驚くほどであるが、それに加えて子育て支援制度と助成金の充実ぶりは、都会での子育ての息苦しさから移住を検討する若い世代には、たいへん魅力的に映ると思われる。検討から移住に至るまでの就業・住宅等の相談は、定住促進協議会を窓口にして、市役所の関係各課につながれる。

移住定住施策についての座学研修につづいて、加賀市が公用車（電機自動車）を閉庁後や使用していない時間に貸し出す“環境に優しいカーシェアリングサービス”を利用させていただき、自治体の課題である地域公共交通の新たなカタチについて体験を行った。利用者登録から予約、返却手続き、利用料金の精算までスマホでできるため、電気自動車の空いている時間であれば、観光客でも市民でも、気軽に利用できるサービスである。市役所のステーションで充電されている車であるので、ガソリン満タンで返却する必要がないため、安価で利用できる。

電機自動車を利用して市内の^{すぎのみず}杉水地区を現地視察させていただいた。市街地から峠を越えた山間集落が廃村状態になっており、集落一帯を活用して、山間地の

暮らしを体験できるようになっていた。ここでの体験や住民との交流が移住定住に繋がるきっかけになるような佇まいのある地区であった。

犬山市への提言

加賀市における移住定住促進施策は、「加賀市定住促進協議会」（平成２８年設立）が、官民連携で行われている。設立のきっかけは、人口減少と人口流出、観光ニーズの変化による観光業の衰退などにより、加賀市の喫緊の課題として危機感をもって設置されたものである。犬山市においては、加賀市ほどの危機的な状況ではなかったため、まだ同様の協議会は設置されていないが、こうした課題は行政だけに任せておくべきものではないと考える。

助成金や補助金、生活に係る支援制度などは他自治体を参考にすれば形は整えることが可能だが、産業経済分野からの協力、移住を受け入れる地域の機運、そして何より情報発信力の工夫等は、広く民間の英知を活かさなければ自治体間競争に勝つことはできないと痛感する。

地域公共交通について、犬山市は独自の自治体ライドシェア事業をスタートさせる直前であるが、現在のコミュニティバスによる事業と組み合わせることにより効果的に犬山市のニーズに合った形態を模索し続けなければならないと考える。市議会としても、アンテナを高くして先進事例を見つけ、調査することから市に提言するための努力を惜しまず続けていきたい。

視 察 成 果 報 告 書

犬山市議会 議長 柴田 浩行 様

犬山市議会議員 大沢秀教

下記のとおり、視察調査の成果を報告いたします。

調査日時：令和6年10月2日（水）

訪問先：富山県南砺市

形態：常任委員会（総務委員会）

調査項目：「移住定住促進策とシティプロモーションについて」

調査の内容

視察調査にあたっては、市民協働部 南砺で暮らしません課長＝大浦幸恵さんと同課主幹・定住・空き家対策係長の^{あそべ}遊部晶子さんが説明してくださった。お二人とも同市出身で、南砺市を愛する気持ちにあふれた職員さんであった。

この日の説明は、前日の加賀市とは対照的に、南砺市の説明プログラムとして完成されたかたちを聞かせていただいたものだった。担当者お二人ともが女性だったことから感じたが、女性に移住を考えていただく視点多いと感じた。

あらかじめ当委員会から送付した質問事項を軸とせず、それらの事項をうまく説明の中に取り込みながら、情熱を加えて楽しくご説明をいただいた。

「自分にあったライフスタイルが見つかるまち」という方針で編集された移住ガイドリーフレット「なななんと」は、シェアが利いた表現ながらも、写真が美しく、内容も解りやすく、知りたい情報がコンパクトにしっかり詰まった冊子として完成度が高いものだった。実際に、単年度で作り替えるのではなく、移住者インタビューのページだけ差し替えて、年度の更新をしているとのことだった。

移住のターゲットは主に東京及び首都圏であるようであったが、移住者の定義は地元出身の分家住宅等も含まれており、人口流出の深刻さが印象的だった。

説明の後、当方からの質疑にお答えいただいたが、印象的であったのは、「建て売り戸建て住宅に住もうという感覚がない」ことであった。県民性というか、富山県南砺市ならではの感覚を強く感じた。

犬山市への提言

南砺市の移住定住施策においては、南砺で暮らしません課が主体であり、補助金や各種行政サービスについては市役所内で連携しているのはもちろんだが、民間の「なんと未来支援センター」が、地域や先輩移住者とのつなぎ役を果たしており、その連携が、移住の相談から体験の案内、移住後の困りごとまでサポートしている。犬山市においては、窓口となる市役所が何から何まで行うという感覚のサービスを求めてしまう感覚が我々にもあるが、官民連携が効果的である。